

同志社大学英語英文学研究会

第二回研究会

9月30日

司会 文学部教授 滝本二郎氏

「カッシーラーの言語観」

神学部専任講師 大志万一徳氏

アルフレッド・コーゼブスキが創始した一般意味論の外に、言語哲学の発展に貢献した人々の中には、疑いもなくエルンスト・カッシーラー、スーザン・ランガー、チャールズ・セリス、ベンジャミン・リー・ウォーフがいる。

カッシーラーの言語観の背後には、人間に対する洞察がある。彼は人間を理性的動物 (animal rationale) ではなくて、象徴的動物 (animal symbolicum) と定義した。いいかえれば、動物も実際の想像力と知性は持っているが、人間のみが象徴的な想像力と知性を持つことが出来るのである。そしてこの人間の象徴的能力の産み出したものが人間文化—言語、神話、宗教、芸術、科学及び歴史—なのである。

カッシーラーは人間の象徴活動を神話的なものと、論理的なものに二大別する。言語はもともと神話的なものと考えられる。感覚経験の集中化が進み、ある一点に到達した時、言葉が生れるのは、同じ過程を経て神話の神が生れるのと同じだという。そして生れ出た言葉は現実となり、言葉と物は完全に一致するのである。

カッシーラーの人間文化及び言語の起源に関する考察は深くかつ独創的と思う。しかし、彼の言葉と現実の関係についての所論は思弁的であり、問題があるのではなかろうか。

「修辞と表現 Emphasis について」

文学部教授 戸川晴之氏

修辞ということが遠くギリシヤの昔より説かれて以来、現代においてそれが如何に理解されているかを考察し、現代英語の文体の三要素とされている Emphasis, Concision 及び Clarity のうちの Emphasis をとりあげ、修辞学的立場から、その表現の Technique として用いられているものを Inversion, Parataxis, Anticipation, Interruption, Repetition Positioning, Polysyndeton, Asyndeton など18項目に分類し、それぞれの手法について現代作家の作品より選び出した範例によって解説する。

第三回研究会

12月8日 (同志社における英語・英米文学の教育・研究に直接・間接に関係する方々をも招待)

司会 文学部教授 木村俊夫氏

「政治諷刺と文学—『マクバード』の場合」

商学部教授 宮井敏氏

「実存主義と芸術—ジャコメツティーについて」

文学部教授 矢内原伊作氏

第四回研究会

2月9日

司会 文学部教授
文学部長 児玉実用氏

文学部専任講師 坂本完春氏

「W. Alabaster のソネットとthe Counter-Reformation」

1959年に Alabaster のソネット集が G. M. Story と H. Gardner の共同編集で出版された。しかし、出版の前後を通じて、彼の文名にさしたる変化は見られない。

Story は Alabaster のソネットを “minor poetry” と控え目に主張しながらも、Donne 以後の詩の伝統の底流を見逃していない。C. S. Lewis は “a neo-Latin poet” と評しただけで、彼の16世紀英文学史でそれ以上の紙面をさこうとはしなかった。最近でも、ようやく、Rickey が Herbert の詩との近似性を指摘したに過ぎない。

Alabaster のソネットは Petrarchan rhyme-scheme を踏襲しながら、Petrarchan conceit は余り見られない。その conceit の僅かな残響も Christian paradox による conceit に消されていることが多い。難解ではあるが、伝統の枠に嵌めると、conceit に何かが起こったことを察知出来る。Alabaster がよりどころとした伝統は the Counter-Reformation のそれが多い。

今回は、主に、conceit の質的变化をたどりながら、その原因を明らかにしたい、視角を変えるなら、metaphysical poetry の源流を明らかにすることでもある。